男声合唱団「昴」第11回コンサート

歌詞・曲目解説

さとうきび畑

寺島尚彦/詞

復帰前の沖縄を訪れた寺島尚彦が、今もさとうきび畑の下に眠る沖縄戦の無数の戦死者や自決者への言いしれぬ思いを、66 回繰り返される風の音に託した。全曲演奏は１１分近くかかるが、今回は尾上和彦編曲の短縮バージョンで演奏する。

ざわわ　ざわわ　ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ　ざわわ　ざわわ
風が通り抜けるだけ

昔　海の向こうから
戦がやってきた
夏の日差しの中で

ざわわ　ざわわ　ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ　ざわわ　ざわわ
風が通り抜けるだけ

あの日鉄の雨に打たれ
父は死んでいった
夏の日差しの中で

ざわわ ざわわ ざわわ
風に涙は乾いても
ざわわ　ざわわ ざわわ
この悲しみは消えない

ざわわ　ざわわ　ざわわ
広いさとうきび畑は
ざわわ　ざわわ　ざわわ
風が通り抜けるだけ
風が通り抜けるだけ

芭　蕉　布

吉川安一/詞

芭蕉布は、イトバショウの繊維で織り上げた、およそ 500 年の歴史を持つ沖縄・奄美地方特産の織物。沖縄の豊かな自然と、芭蕉布に託したうちなー（方言で沖縄の意味）の心を歌い上げている。

海の青さに　空の青
南の風に　緑葉の
芭蕉は情けに　手を招く
常夏の国　我した島沖縄（うちなー）

首里の古城の　石だたみ
昔を偲ぶ　かたほとり
実れる芭蕉　熟れていた
緑葉の下
我した島沖縄（うちなー）

今は昔の　首里天加那志
唐ヲゥーつむぎ　はたを織り
上納ささげた　芭蕉布
浅地（あさぢ）紺地（くんぢ）の
我した島沖縄（うちなー）

労 働 者 の 合 唱

歌劇「沖縄」制作委員会/詞

１９６０年代、沖縄は米軍占領下にあり、ベトナム戦争の最前線基地となっていた。日本の真の独立と沖縄の全面返還をめざす取り組みを発展させようと、日本のうたごえ運動の総力を挙げ、専門家の協力を得て集団創作されたのが歌劇「沖縄」である。１９６９年に全曲初演され、１９７０年から全国公演が各地で取り組まれた。この曲はその２幕２場で歌われた作品。

俺たちの土地
俺たちの空と海
この胸に　突き刺さる痛み
荒れ果てた土地
奪われた暮らし
のさばるアメリカの基地
俺たちの沖縄　沖縄

夜となく昼となく
アメリカ軍の銃剣を　背に受けて
夜となく昼となく
俺たちは働く
がんじがらめに締め付けられて
ものも言えないけれど
怒り込めて堪え忍ぶ
仲間の目と目

夜となく昼となく
疲れ果てていても
夜となく昼となく
夜となく昼となく
コンクリート打つ　俺の胸の中に
民族の赤い血がたぎる
屈辱の根を　断ち切る力蓄え
ひとりからひとりへ
たたかい広げる俺たち

必ず迎えよう　幸せの日
ともに進もう　俺たちの明日へ
いつの日か近づく　その日をめざし
俺たちの腕を　固く結べ
俺たちは職場から
たたかいを広げる
職場から　たたかいを広げる

沖 縄 を 返 せ

全司法福岡高裁支部/詞

１９５６年に作られ、米軍占領下の沖縄での祖国復帰闘争の盛り上がりの中で、沖縄返還運動の象徴的な歌として全国で広く歌われた。この歌が未だに過去のものになっていない沖縄の現状が続いている。

固き土を破りて
民族の怒りに燃ゆる島　沖縄よ
我らと我らの祖先が　血と汗をもて
守り育てた　沖縄よ
我らは叫ぶ　沖縄よ
我らのものだ　沖縄は
沖縄を返せ　沖縄を返せ

「一坪たりとも渡すまじ」伊江島

日　々　草

星野富弘/詩

体育教師であった星野富弘は、体操指導中の事故により手足の自由を失った。しかしその障害に負けず、入院中に筆を口にくわえて文字と絵を描き始め、自分の思いを詩や絵としてまとめた詩画として発表するようになった。ピアニスト加羽澤美濃がその詩に感動し作曲した作品。
他愛もないことで喜んだり人を傷つけたり、平凡ではあるが一語では尽せない私たちの日常。変哲もない日々の一喜一憂もまた、生きる意欲を燃え起たせてくれるものかもしれない。

今日も一つ
悲しいことがあった
今日もまた一つ
うれしいことがあった
笑ったり 泣いたり
望んだり あきらめたり
にくんだり　愛したり
そしてこれらの一つ一つを
柔らかく包んでくれた
数えきれないほど沢山の
平凡なことがあった

花　の　歌

佐藤　信/詩

カストロとともにキューバ革命を成功させ民衆の英雄だったチェ・ゲバラが、ボリビアでゲリラ活動中に捕えられ 1967 年に処刑された。その訃報を聞いた林光が佐藤信の詩を改訂し、この歌が生まれた。花は平和の象徴とされている。

小さな草が　芽を吹いた
それからそっと　花つけた
※たぶん　そいつは遠い朝
それが僕らの歌だった

僕らはいつか　そこにいた
僕らはいつか　見つめてた
※春さえ来れば　芽を吹いた
雨さえ降れば花つけた

一番寒い　冬の夜
一番ひどい　雪の時
※声にはせずに　歌ってた
忘れぬために　花の歌

ぶ ど う と か た ば み

～ ボスニア・ヘルツェゴビナに ～

谷川 雁/詞

昔から宗教や民族・地域の対立に翻弄されてきたボスニア・ヘルツェゴビナ。しばらく平穏だった日々が 1991 年ユーゴスラビアの解体で一変、昨日までともに暮らした人々が一夜で敵に変わり、やさしさ故により強く憎しみあうことになった。人間の弱さと悲しさ、絶望の中に生きる人々のいのちの叫び・・・・。

朝焼け　ことば　ひとつ　はじける
ぶどうの　房に　弾おと　とどろき
くずれる　窓から　こどもたちがのがれる
流れた　血汐は　そのままに　錆びつく
敵とは　友の　まいた　やさしさ
となりに　生える　苦しみの花
きょうは　きのうと　なにもかもちがう

たたかい　やまぬ　白い　わが町
ほのかに　熟れる　かたばみの鎖り
地をはう　にくしみ　青くもつれ火となる
離れる　すべない　人さしと　引き金
撃たれた　恋は　どこに　うずめる
つぶやく　だけの　胸の夕焼け
きょうは　きのうと　なにもかもちがう
Lololo-

君 死 に た ま ふ こ と な か れ

（旅順口包囲軍の中に在る弟を嘆きて）

与謝野晶子/詩

歌人与謝野晶子の代表作。晶子は日露戦争に従軍した弟の身を案じて、1904 年に雑誌「明星」にこの詩を発表した。政府批判を思わせる内容に波紋が広がったが、晶子は「これは自分の自然な感情である」と、道理ある主張を貫いた。ただその後の情勢の中で晶子は戦争を賛美するなど、反戦という点では一貫性がなかった。

あゝをとうとよ、君を泣く
君死にたまふことなかれ、
末に生まれし君なれば
親のなさけはまさりしも、
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや、
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや。

堺の街のあきびとの
旧家をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば、
君死にたまふことなかれ、
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとても何事ぞ、
君は知らじな、あきびとの
家のおきてに無かりけり。

君死にたまふことなかれ、
すめらみことは、戦ひに
おほみづからは出でまさね、
かたみに人の血を流し、
獣の道に死ねよとは、
死ぬるを人のほまれとは、
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思されむ。

あゝをとうとよ、戦ひに
君死にたまふことなかれ、
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは、
なげきの中に、いたましく
わが子を召され、家を守り、
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる。

暖簾のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を、
君わするるや、思へるや、
十月も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ、
この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき、
君死にたまふことなかれ。